

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	比較文明学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・ 比較文明学専攻・後期課程 1 年	小嶋慶太	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学 文学研究科比較文明学専攻・助教 A	片上平二郎	印
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	今日における社会否定の試みに対するフランクフルト学派の視点の転用可能性		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学 文学研究科 比較文明学専攻博士課程後期 1 年	小嶋慶太	
研究期間	2012 年度		
研究経費	200 千円（実績額又は執行額）		

研究の概要（200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

テオドール・アドルノらによるフランクフルト学派の思想が、今日の社会に対して批判的な芸術や思想を分析するのにどのように転用可能か、あるいはどのような点においてアクチュアリティを持ち得るかを探る。主に、音楽・映像といった視覚・聴覚メディアにおいて、現状の社会（倫理的、あるいは政治的な面において）に対して異議申し立てを行うような芸術に対し、それらがフランクフルト学派の提唱した「批判理論」という概念に基づいてどのように位置づけられるかという点に軸を置いて、重点的に検討する。それにより、現状の社会における文化の立ち位置を考察できる、あるいは新たなアプローチが可能となる視点を獲得することを目的とする。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[批判理論] [理論社会学] [フランクフルト学派]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

まず、テオドール・アドルノらによるフランクフルト学派の思想を、文献の整理や論文の読解などで再検討し、彼らの議論に対してよく主張される「エリート主義的である」という批判について検証した。

アドルノは亡命先のアメリカ合衆国で、芸術を始めとする文化が産業資本のもとで「商品」と化してしまったこと、その「商品」としての「交換価値」によって芸術の価値が判断されている事態を目の当たりにする。それは、文明化の歴史としての「啓蒙」がもたらしたものであった。アドルノは、マックス・ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』で、人間が自然の「暴力」から身を守るために、「啓蒙」的な理性によって文明を作りあげてきた歴史を論じた。近代の人間は、実証主義的な科学の知識や技術によって、世界を都合のよいかたちに加工し、支配しようとする。しかしそれによって、万物は均質化、画一化され、「同一化」されてしまう。

そのように文化のすべてが「商品」となって、「交換価値」でしか評価されないということは、文化が持っている多様性が抑圧されるということでもある。そこでアドルノは、映画、ラジオ、広告、流行歌などといった産業資本下の文化を「文化産業」という概念のもとに捉えたいうえで、芸術が産業資本によって他律的な「商品」と化していること、それらがその社会をイデオロギー的に美化するような、体制の保管物となってしまうことを指摘する。そして、その「文化産業」を媒介として大衆の意識を操作し均質化する、資本主義の欺瞞を激しく非難した。その一方でアドルノは、この他律性と対決し、現実を隠蔽するイデオロギーをふりまく「文化産業」と化すことを逃れるために、芸術は社会から相対的に「自律」する必要があるとした。芸術の世俗化に対抗する結果として、「自律性」が生じるというわけである。

フランクフルト学派が展開したこれらの「文化産業」に対する非難は、大衆文化への無理解を示したものとされ、否定的に捉えられやすく、その後のアカデミズムで広がったポピュラー文化研究の文脈で度々批判されることとなった。フランクフルト学派の仕事には、文化の社会学的分析を構築するための概念的基礎を探索するのは難しい、並びに実証的基礎に欠けているという意見もある。

しかし、特に「文化産業」批判の急先鋒であったアドルノに限ってみても、本人の個人的な嗜好によって、西洋音楽の本流である芸術音楽を享受し、趣味の問題としてポピュラー音楽、ジャズを理解しようとしなかったというような議論を展開していたわけではない。もちろん、彼自身にそのような傾向があったことは完全に否定しえないにせよ、たとえばクラシック音楽を全肯定し、それ以外を否定するというような、単純な二者択一を唱えていたわけではなかった。アドルノは、特にフランクフルト学派の一員としても数えられるヴァルター・ベンヤミンとの関わりの中で、大衆文化や複製技術メディアのもつ「変革の諸要素」を探求することを等閑視していたわけではなく、現代芸術のアクチュアリティを汲み出そうと、「自律的な芸術作品」のもつ社会批判的な意義という問題をめぐって詳察を重ねていた。

たとえばアドルノは、その初期においては短時間しか録音できず音質も貧弱であったレコードに対し批判的だったが、晩年には、長時間の録音が可能な LP という型式に大きな期待をよせている。アドルノはレコードの中にある「文化産業」としての性質を嫌っていたのであり、「録音された音楽は本当の芸術ではない」とするような文化保守的発想から、レコードというメディアを単純に否定していたというわけではない。

また、アドルノは社会における「同一化」という性格を批判するために、そこから排除されてしまう存在、あるいは社会が自らの中に組み込むことのできない存在を、「非同一性」、「非同一的なもの」というモチーフでとらえようとした。しかし、「非同一的なもの」として存在しうるような音楽作品を見つけたとしても、それだけで安心し、その評価を一定としていたわけではない。彼は、期待を寄せていた音楽に対しても、それが社会の中で「老化」し、その鋭さを失ったことを厳しく指摘している。

つまり、フランクフルト学派がとらえた「文化産業」という概念に対する批判は、単純に大衆文化の否定を示したものでも、エリート主義の文化批判でもなく、芸術を始めとする文化の自律性をいかに問うものかという視点から生まれたものなのである。見過ごしてはならないのは、フランクフルト学派の代表であるアドルノのポピュラー文化批判は、単純な無理解と偏見によるものではなく、特に音楽に関して、きわめて専門的な知識による裏付けによるものということである。単純にエリート主義的な偏見ではなく、当時の西洋音楽の近代主義の視点から専門的に、かつ詳細に見ていたということ、その姿勢が音楽以外の文化にも向いていた点は無視してはならないだろう。そのような点を踏まえるなら、フランクフルト学派の議論から、文化の社会学的分析を構築するための概念的基礎を探索するのは難しい、また、フランクフルト学派の主張は実証的基礎に欠けているという意見は、一面的であるといわざるをえないだろう。

研究成果の概要 つづき

一方、アドルノが「文化産業」のようなポピュラー文化を、大衆を均一化するものと厳しく批判し、それらは偽の個性を与えるものであるとしたとき、それは逆に、阻害されていない個性、本物の自己がまだどこかにあるということを想定していたということもいえるだろう。しかし今日では、個性は無限化に多様化し、尊重されるものになっている一方、個々人はまさにこの特徴のために交換可能なものとなっている。ポピュラー文化の嗜好が、趣味というよりも「何を選ぶか」という個性になっているからである。つまり、アドルノの時代にはまだすべてを支配できなかった資本が、性質を変えながらより包括的に大衆文化を支配しているのが現在ということである。その一方で、インターネットを通じて交わされるコミュニケーションから生まれた音楽が隆盛になり、以前とは違った評価軸が生まれていることも指摘されている。

このような時代に、社会に対して否定的な文化に対して、フランクフルト学派の思想はどのように有用なのだろうか。毛利嘉孝は、アドルノの議論を参照しつつ、ポピュラー文化と資本主義の関係を考える際に、多くの場合 2 つの極端な議論に別れることを指摘している。一つは、反アドルノ的な立場であり、ポピュラー文化は自由の表現の結果であり、資本には回収しきれない自律的な領域が存在していて、そこでは人間の想像力が発揮されているというもの。もう一つはむしろ親アドルノ的な立場で、今の世の中にあるポピュラー文化は、商業主義に毒されていて、それらに熱中している人間は、文化が本来持っている「自由」を奪われているというものである。

しかしこの 2 つの正反対の主張は、どちらも既存の主義を否定することで自分の立場を獲得する「サブカルチャー・エリート主義」として表れる。彼らは、ポピュラー文化が持っている政治的可能性に期待を寄せ、大衆に幅広く流行しているものは資本主義に支配されていること、世界の流行からはずれたものに、資本の支配が貫徹していないことに期待を寄せていること、そしてそれをすべての人が知っているわけではなく、ある特別な人(サブカルチャー・エリート)だけが理解できると考えている点で共通している。この議論には、資本主義の外部に存在する秘密を知っている人々は、こうした議論をしている当人であることを前提としている発想と、主張する人の趣味の発露とヒロイズムが紛れ込むことになる。しかし、これこそアドルノがもっとも強く批判した対象であり、彼はこういった種類の人間を俗物扱いしている点は見逃せない。

また、フランクフルト学派が「文化」を論じる際に常に注意してきたのは、それらがひとしく社会の中に存在しているということである。資本主義の中に生まれたものは、その内側に存在する以上、やがて資本の支配によって均質化・画一化されてしまうという危険を宿命的に孕んでいるともいえる。「規格化」を逃れた芸術に「自律」する可能性があるとしても、それは社会における「商品」という性質を持つことと引き換えにもたらされたものである。

たとえばアドルノは管理社会に対する「アンチテーゼ」が、彼が評価した「新音楽」の内実の大きな要素をなしていると考えていた。それゆえに、「新音楽」をその役割から開放し、それが社会と調和的な関係にあるようなものとして、伝統的音楽にとってかわるような存在になることをアドルノは批判していた。もしそうなってしまったら、「第二の自然」という「仮象」である「調性体系」によって、見せかけの調和を保っていた音楽に、「新音楽」が取って代わるだけのことに過ぎない。「規格化」や「擬似個性化」などの要素から、現状肯定的なイデオロギーを大衆に与える「文化産業」に対し、「新音楽」はそのみせかけの肯定性を暴くのだが、その一方で、それを現状の社会の中で「肯定的」なものとして安定させてしまえば、社会の既知のものとして還元され「同一化」されてしまい、「非同一的なもの」としての性質を失ってしまう。

したがって、フランクフルト学派の思想は、大衆文化から生まれたものを全て等閑に付して満足するようなエリート主義的な発想や、あるいは反対に、大衆文化の可能性を盲目的に信じ既存の権威は否定されるべきとするような発想に対し、その一面的な見方を批判するための、オルタナティブな視点を保ち続けるためのものとして利用するべきであるといえる。その点を踏まえれば、音楽・映像といった視覚・聴覚メディアにおいて、現状の社会(倫理的、あるいは政治的な面において)に対して異議申し立てを行うような作品に対し、既存の社会的な全体性やその枠組み条件の是非を問い直すフランクフルト学派の特徴である概念、「批判理論」は、安易にそれらを全肯定・全否定するのではなく、それらがいかに社会否定的であっても、文化として社会の内側に存在するものであるということ、それ自体が現状肯定的なものとして因襲化する可能性があるということ、常に意識し続ける作用としてはたらくだろう。大衆文化や音楽を論じる際に「肯定か否定か」というような安易な二者択一に安住しないために、フランクフルト学派の議論は今日においても参照され続け、その価値を問われていくべきものとして有用なのである。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

小嶋慶太、「アドルノから何が『肯定できるか』——『ジャズ論』をめぐって」、『境界を超えて——比較文明学の現在 13号』、2013、pp. 67-88